

## 東京 2020 パラリンピック競技大会からのメッセージ

齊藤まゆみ<sup>1)</sup>

### Message from Tokyo 2020 Paralympic Games

Mayumi SAITO<sup>1)</sup>

#### 1. はじめに

東京 2020 パラリンピック競技大会は、2021年8月24日から2021年9月5日までの13日間、当初の予定より1年延期かつ緊急事態宣言下で開催された。パラリンピック競技大会（以降、パラリンピック）は、夏季パラリンピック1960年のローマ大会を遡って第1回としていることから、東京は1964年と2020（2020 + 1）年、世界で唯一2度の夏季パラリンピックを開催した都市となった。しかし何もかもが試行錯誤で、開催そのものに対する賛否両論があったことも事実である。

パラリンピックには3つの段階がある。まず、ストークマンデビル病院から始まったリハビリテーション成果披露の場という位置付けのパラリンピックである。例えば、1964年の東京大会は、国内のリハビリテーション病院から多くの選手が参加しており、日本国内に「障害者のスポーツ」「障害者の社会進出」を社会に認知させる契機となった。次は、リハビリテーションから競技スポーツへのシフトチェンジである。国際オリンピック委員会（IOC）と国際パラリンピック委員会（IPC）の合意のもとにオリンピックとパラリンピックを同一の組織委

員会が担うという方式の変更がその背景にある。2008年の北京大会からはオリンピックとパラリンピックが同じ組織委員会のもとで開催されるようになり、競技性の高さや卓越性という方向性が明確となった。そのため「メダルの価値」を高めるために、競技種目やクラスが厳選された。そして「2度目の開催都市となる東京」がどのようなレガシーを残すかである。日本は「スポーツを通じた共生社会の実現」を掲げているが、社会にはまだまだ有形無形のバリアが存在している。次代を担う大学生に「パラリンピック」を通して発信できるメッセージはなんだろうか。縁あって、パラリンピック組織委員会の大学連携検討会に委員として参画することとなり、2000年のシドニー大会からパラリンピックを観戦してきた私にとっての関心ごとは「東京2020パラリンピック競技大会（以降、東京パラ）からのメッセージ」が、社会にどのような変化をもたらすであろうかということである。その答えは数年後に形となって表れるだろう。

#### 2. 筑波大学と東京パラ

東京パラには、筑波大学体育専門学群の瀬立モニカ（パラカヌー）選手（図1）と大学院障

---

1) 筑波大学体育系

University of Tsukuba, Faculty of Health and Sport Sciences



図1 パラリンピック旗を持って入場する瀬立モニカ選手（前列  
向かって左）  
画像は本人提供

害科学学位プログラムの高橋利恵子（ゴールボール女子）選手が現役学生として、また卒業生や附属学校出身者の19名を含める総勢21名が選手として参加した。また、コーチやクラスファイヤー、テクニカルサポート、医療スタッフその他多くのささえる立場で筑波大学関係者がコアメンバーとして大会に関わった。私も本来であれば会場にいるはずであったが、今回は後方支援としてつくばよりオンラインで関わることとなった（図2）。パラリンピックが自国開催であることは、選手にとっても運営側にとっても大きなアドバンテージとなるはずであったが、COVID-19感染拡大防止のためにさまざまな制約があり、そのメリットを十分にいかすことができない状況となった。そのような中で、最後まで大会を遂行できたことに対し、関わったすべての人に敬意を表したい。

### 3. パラリンピックの認知度

ロンドンパラリンピック以降、私はYMFS「障害者スポーツを取り巻く環境調査」のプロジェクトメンバーとして「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」と「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」を実施して



図2 私が使用予定だったグッズ

いる。

内閣府の世論調査結果（2015）では、東京パラ開催の認知度は98%であるが、具体的な競技や選手についての認知度は低い。東京パラの日本代表選手約120人の認知度を調べた結果、最も高い「国枝慎吾」選手が45%であり、金メダリストの「木村敬一」選手や「道下美里」選手ほか、多くの選手の認知度は10%未満で

あった (YMFS, 2021)。したがって、東京パラ後も選手の認知度に関する傾向は変わっていないことが示された。

テレビ (地上波) の放映時間についても北京大会以降大会開催前、大会期間中、大会終了後の定点観察を行なっている (図3)。大会期間中の放映時間は東京パラまで右肩上がりであり、自国開催ということで全競技放映が実現した。東京パラ開催決定後、「パラリンピックをどう伝えるか?」ということで、報道関係者はさまざまな研修を重ねてきた。私自身もアドバイザーとして関わることもあり、素直に「見る」「知ること」「感じる」の大切さを再認識しながら、パラリンピックが発するメッセージとは何かを考えてきた。

自国開催となる東京パラは、開催中に史上最長の放映時間、かつオンデマンドでインターネット等を活用すれば繰り返し見ることができる環境が整えられた。しかし東京パラの観戦状況については、テレビ観戦者は33.0%であり、リオデジャネイロ (以降、リオ) 大会の30.0%から微増しているに過ぎなかった。前回のリオ大会は、日本との時差が12時間と昼夜逆転であるにもかかわらずこの数値が示すことは何であろうか。さらにテレビやインターネットでも観戦しなかったという回答が42.6%であり、リオ大会の39.5%よりも高くなっていることも注視すべき点である。

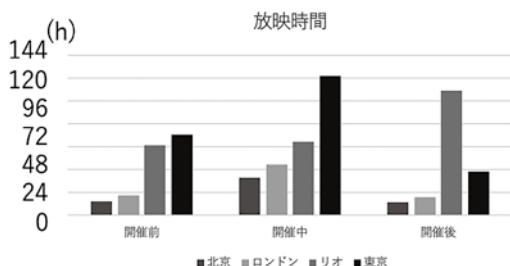


図3 パラリンピックテレビ放映時間の比較

#### 4. 無観客の会場ツアー

東京パラの雰囲気を知るために、瀬立選手か

ら画像を提供してもらった。話題となった選手村の段ボールベッド (図4) や感染症対策としての行動フローが視覚化されている (図5) ことが特徴であろう。また、私は過去の大会会場で特にトイレに注目してきた。東京パラのユニバーサルデザイン (図6) は、ただ単に車いすやオストメイト対応しているだけでなく、手すりの位置などに工夫がこらされており、数パターンの個室が設置されるなどより進んだ対応となっていた。また、パラリンピック開催都市で進むインフラの整備・バリアフリー環境の整備 (図7) はこれまでも報告されてきた。それに加えて東京パラでは何が変わるのか、今後の社会に注目していきたい。



図4 段ボールベッドが設置された選手村居室



図5 会場内の感染症対策



図6 ユニバーサルデザインのトイレ



図7 移動時のバリアフリー対応

## 文献

内閣府(2015):東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査.

YMFS (2021): シンポジウム「パラリンピック報道とパラリンピアンへの認知度における社会発信の変化」. 2021. 12. 17